思い出して「復興五輪」

原発事故で避難の名経大生

名古屋経済大野球部の大内良真（りょうま）さん（一九）＝二年＝は福島県飯舘村出身。東日本大震災に伴う東京電力福島第一原発事故で全村避難となった。福島商業高校時代は避難生活を続けながら甲子園を目指した。高校二年の秋には、五輪会場に決まったあづま球場を視察に訪れた国際オリンピック委員会（IOC）のバッハ会長を、被災地の球児として迎えた経験もある。

甲子園には行けなかった大内さんだが、あづま球場は思い出深い場所だ。二年夏の福島大会初戦、白河実業戦が印象深い。

主力投手として先発したが、最初の打席で親指をけが。痛みに耐えながら七回途中まで投げた。奮起した打線に救われ、逆転勝利した。この夏、福島大会準優勝だった。

飯舘村は自然豊かで、幼いころから山でキノコを採ったり、川で魚釣りをしたり。野球は小学一年の時、地元のスポーツ少年団で始めた。小学三年の時、震災と原発事故が起きた。

一家でいったん栃木県に逃れその後は福島市で避難生活を続けた。震災翌年、福島市内の野球チームに入って野球を再開し、中学、高校と野球を続けた。

■バッハ会長と握手

バッハ氏を迎えたのは一八年十一月。福島商野球部の仲間二人らと一緒に、あづま球場隣の体育館で会い、球場まで歩いてバッハ氏を案内した。

バッハ氏から「スポーツには人の心を動かす力がある」と言われた。「自分も、野球がなかったら、ここまで頑張れなかった」と思ったという。フェンシングの五輪金メダリストでもあるバッハ氏と握手したが、手は分厚くて硬かった。「厳しい練習をやってきた証し。自分も」と気持ちを新たにした。

飯舘村は今も、汚染土を詰めた黒い袋があちこちに積まれる。戻らぬ住民は多く、大内さんの家族も福島市で暮らす。愛知での大学生活もコロナの影響で授業や部活動が突然、中止になったりする。それでも「しっかり、大学で野球をする」と前を向き、「いつかは自分も五輪に」と夢を描く。

懐かしい球場での五輪の試合は、テレビで見るという。無観客だが、「テレビを見た人たちが『復興五輪』という言葉を思い出してくれたら」と願う。

（中崎裕）

福島商時代のタオルを前に五輪への思いを語る大内良真さん＝愛知県犬山市の名古屋経済大で